

しゅんの女ひと

123

今まで培った経験を次代を担う子どもたちに伝えたい！



“ライモンダ” 3幕より、第4パリエーション



“バキータ”より、女性第一舞踊手

小さい頃からの夢だった華やかなバレエの舞台。その夢を実現、中央の舞台でもソリストとして存分に活躍した地元帯広出身の小椋たま美さん。バレエ・ストレッチ スタジオアファン代表、高倉みはるさんの要請に応じて帯広に戻り、「バレエの楽しさを少しでも伝えたい！」と指導に余念がありません。

踊る喜びを味わってほしい！

「ごめん下さい」とスタジオアファンの玄関の扉を開けた時から、終始笑顔で応じてくれた小椋さん。

バレエの道に入ったきっかけを伺うと、「5歳の頃、チケットを頂いて母と観に行ったバレエのステージで、ダンサーの衣裳があまりにも素敵で、すっかり憧れてしまいました」と、昨日のことのように話す小椋さん。

たまたま通っていた幼稚園が園児の帰ったあと、バレエのレッスン場となっていたことから、なん無くバレエを習い始めました。

それから30余年、スタジオオで小さな子どもたちと向き合う小椋さんは、「この子どもたちはエネルギーの塊です。自分を表現する方法のひとつとして、踊りはとても面白いもの。踊りを通して、自分自身を知ることや、他と協力し合うからこそ生まれる喜びを味わってほしいです」と、自分の体験と重ね合わせにこやかに話してくれました。

「全ては繋がっている」

「あなたにとって、バレエとはなんでしょうか？」との問いには「自分の良いところも悪いところも映し出してくれる”気づき“を与えてくれるもの」と、確信に満ちた答え。

その小椋さんは市内で生まれ育ち、帯広柏葉高校を卒業後は東京へまっしぐら、谷桃子バレエ団で念願の谷桃子・尾本安代に師事。更に大谷バレエカンパニーでは大谷哲章に師事、ソリストとして、数々の公演に出演しました。

その小椋さんの趣味は”読書”。そして”自然と動物との触れ合い”だそう。「どちらも、静かで無になれる時間を持つことができるので」が理由です。

まさに動と静を共有する小椋さん。座右の銘は「全ては繋がっている」との余韻のあるひと言でした。

「これまでの経験を、次の時代を担う子供たちに伝えていきたい」と決意を述べる小椋さんに、存分に期待を込めエールを送りたいと思います。

(取材・文／成瀬 登 撮影・菅原正嗣)



バレエ・ストレッチ スタジオアファン 専任バレエ教師

小椋たま美さん(39)



大谷バレエカンパニーにて “バキータ”

スタジオアファンへのお問い合わせは

住所 帯広市西3南26-1
TEL 0155-21-8771
携帯 090-1642-0617 (高倉さん) へ



スタジオアファンのベビー科クラスの練習風景